

年代	黒糖に関する主なできごと
1605	直川智によりサトウキビの栽培技術と黒糖の製法が奄美に伝わる
1623	琉球の儀間真常が中国に使いを送り、砂糖の製造方法を学ばせ、黒糖の製造を開始
1715	江戸幕府による砂糖の輸入制限、砂糖の国内生産を奨励
1745	薩摩藩、年貢を黒糖に換算し、奄美群島に強制的に黒糖を納めさせる サトウキビ栽培と黒糖製造が本格化
1777	薩摩藩、喜界島、奄美大島、徳之島において第一次惣総買入制を実施(天明7年(1787)まで)
1798	讃岐産和三盆が初めて大坂の中央市場に登場
1830	薩摩藩、奄美群島で第二次惣総買入制を実施
1865~	薩摩藩、奄美大島に4つの白糖工場を建設・操業開始するも、明治4年(1871)までに全て操業中止
1878	奄美群島での砂糖自由売買が許可される
1914	第一次世界大戦開戦 世界的に砂糖生産量減、砂糖価格暴騰
1923~1931	砂糖の世界的暴落
1953	奄美群島が日本に復帰し、群島内の黒糖が本州に向けて販売可能となる
1965	国産砂糖を保護する「糖価安定法」制定 ※含蜜糖である黒糖は対象外
昭和後期~	奄美群島内で自発的な黒糖製造継承が起きる
2024	「薩南諸島の黒糖製造技術」が国の登録無形民俗文化財に

おさとう小話

黒糖と和三盆

18世紀半ば、国内で黒糖を作るのは琉球と奄美だけ。薩摩藩がサトウキビの栽培や黒糖製造を厳しく管理していた時代に、奄美出身の関良助は、四国巡礼の途中、讃岐で病気にかかり、地元の医師向山周慶に介抱される。そして帰郷後、当時死罪となる重罪を犯してサトウキビの種茎を讃岐国に持ち出し、周慶の砂糖製造に協力した。これがのちの和三盆となり、讃岐の財政を救った。
香川県高松市には、周慶と良助を祀った「向良神社」があり、親しみを込めて「サトガミ様(砂糖の神様)」と呼ばれている。

薩摩藩が黒糖を作らせた理由

当時の薩摩藩は、幕府に命じられた木曾川治水工事、島津重豪の開明化政策などに費用がかさみ、破綻の危機にあった。砂糖が高価な時代、黒糖は薩摩藩にとって効率のよい換金作物だったため、財政改革のひとつとして奄美の砂糖の専売制の強化を行った。これは奄美の人々に大きな負担をかけたが、この財政改革の成功が、のちの集成館事業や明治維新を推進する資金になった。



財政改革の責任者 調所広郷

奄美と白糖

〈江戸～明治時代:奄美産の白糖〉
白糖の作り方は寛文2年(1662)に中国から沖縄へ伝えられており、奄美でも明和4年(1767)以前には白糖が作られていた。
慶応から明治初期にかけて、奄美大島に4つの西洋式機械制白糖工場が作られたが、大量に必要な薪の供給体制を確立できなかったこと、暴風による工場倒壊などが重なり、廃止となった。建物に使われていた切石は民家や奄美市立名瀬小学校の石段等に転用されている。
〈昭和中期:白糖の原料づくり〉
戦後、日本は白糖の大半を輸入に頼っていたが、昭和34年に農林省が策定した「国内甘味資源の自給力強化総合対策」により、白糖の製造が推進された。この頃、薩南諸島では集落ごとの伝統的な黒糖製造から、大規模工場による「原料糖」の製造に切り替える工場が多数あったという。



久慈の白糖工場模型(瀬戸内町埋蔵文化財センター蔵)

島で見られる史跡や展示

薩南諸島には、かつて集落での黒糖づくりに使用されていたサタ(砂糖)小屋やサタグルマ(圧搾機)などが残っている。

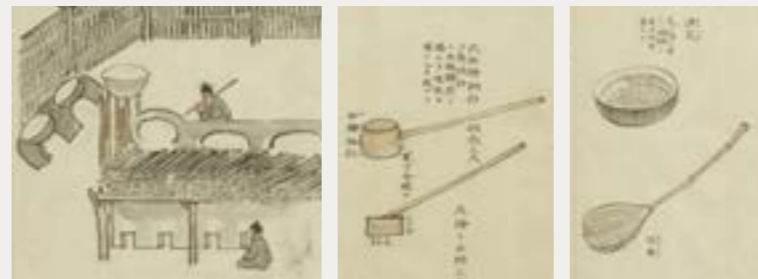
サタヤドリと呼ぶ地域もある



サタ小屋(沖永良部島)



サタグルマ(沖永良部島)



「南島雑話」奄美市立博物館所蔵

江戸時代の奄美でどうやって黒糖を作っていたの?

江戸時代末期に作られた『南島雑話』の記録に、サトウキビを搾り、3つの鍋で煮詰め、アクをとるといった黒糖作りの様子が描かれている。『南島雑話』は奄美に遠島(流刑)となった薩摩藩士・名越左源太が島の風物をまとめたもので、中には「砂糖を製する事は島中第一の産物であること。島民はこの産業に従事しない者は一人もいない。砂糖キビを管理する役職の人たちは、九月から翌年二月まで昼夜見回り、管理、取り締まりなどをする」という統制の厳しさを感じさせる文もある。

《黒糖について学べる施設》

各島の資料館などで、島の歴史の一部として黒糖に関する歴史や道具を紹介している。

種子島	黒糖伝承館 ※黒糖作り体験施設	熊毛郡中種子町野間5979番地
奄美大島	奄美市歴史民俗資料館	奄美市笠利町大字須野67
	奄美市立博物館	奄美市名瀬長浜町517
加計呂麻島	加計呂麻島展示・体験交流館	大島郡瀬戸内町諸鈍316
徳之島	伊仙町立歴史民俗資料館	大島郡伊仙町伊仙2945-3
沖永良部島	和泊町歴史民俗資料館	大島郡和泊町根折1313-1
与論島	与論民俗村	大島郡与論町麦屋693-2
	ゆんぬ体験館	大島郡与論町立長3313

もっと知りたい!

黒糖の歴史

BROWN SUGAR HISTORY

黒糖が辿った歴史をご紹介します。

(参考資料) 萩原 茂「奄美地域の糖業(Ⅰ)~(Ⅴ)」鹿児島大学リポジトリ/今石みぎわ「薩南諸島における伝統的製糖技術」東京文化財研究所刊行物リポジトリ/名嘉 正八郎「沖縄・奄美の文献から見た黒砂糖の歴史」/大和村公式サイト/ワンダーアママ(2025年3月別冊/Vol.11)

国産砂糖のはじまりはどこから?

1596~1614年、奄美大島大和村の直川智が琉球に渡航しようとして中国へ漂着した際に製糖技術を習得したのが始まりという説もあるが、近年では元禄1年(1688)もしくは翌年に同じく大和村の三和良が技術取得のため、琉球に渡り帰島してからが始まりであるという説もある。糖業が産業として発展してきたのは、このあたりからであるということが現在では主流の説である。場所は、大和村の大和浜が一番最初であるということは両説に共通している。

直川智翁を祀った神社



写真提供:大和村

開饒(ひらとみ)神社

明治15年(1882)、直川智翁を祀る神社として思勝の尾神山の麓に建立され、昭和59年に改築されている。大和村では、8月最終日曜日のひらとみ祭りの午前中、神社に黒糖の豊作祈願の参拝を行っている。